

新文化  
(昭和三十年)

創刊号より

終刊号

秋文化

編集兼発行人  
日 辺 竹 次 郎  
萩 市 鶴 江  
電話218(呼出)  
印 刷 所  
萩 市 浜 崎 町  
萩印刷株式会社

週刊「萩文化」の創刊に當りて

昭和二年の暮から、新装束となつた  
秋田市民館に招かれて郷土研究の文化の振興  
といふ重き使命を當させられた。それ以後、滿五  
ヶ年もの月日を経過せしめ、其の間に在るの  
絶大なる支援助力賜つて、其の功績を、勸告せ  
て御覽いたした。誠に感謝の堪えないものが  
ございました。私に於いては生涯に於いて  
最も酬かへない、又感激深い、其の職である  
此處で感謝の氣が湧き上つた。其の職を退き  
後進に譲渡する共に、更に一層の精進を期  
して、郷土文化の振興に貢献したいと存じま  
す。故文化の刊物を企圖したものであ  
ります。

本紙「利文化」は、その以山本創製紙であるが主宰刊行された郷土文化研究の機関紙でありました。昭和十三年五月から戦時中出版物規制の爲中止せられる迄（十九年六月）六ヶ年の水・開港市文化の興隆に貢献せられたものでありました。それを此の私蔵がその紙名を譲りうけて紙名を嗣いだもので題字は山本勉郎先生にお願した次第であります。本紙の目標とする処は、その名の示すとおり

郷土の文化の振興であります

旧藩時代の萩は全国屈指の文化の府で、明倫館教育をはじめ私学、郷学の普及は人材を幾多輩出し、時代の先驅をなしたものであります。私は郷土萩をして昔日のような文化の都たらしむるため余生を捧げてやまないものであります。

幸に諸藩の絶大なる御支援によつて私の企願が達成されまふ様祈願するものであります。創刊に當つて、今迄の御礼を申述べますと共に、今後尙一層の御愛顧と御指導を御願する次第で御座います。

昭和三十一年一月十五日

合位

本紙の特色

一、学校教育の紹介  
市内各学校の教育方針、年度の重点、行事計画、PTAの活動状況、優秀児童愛護会の紹介等及び各校先生方の執筆による紙上

週刊「新刊」  
「萩文化」の  
創刊を祝して

史都秋に文化の華は咲き出でぬ  
山本勉弥  
夏橘と香を競ひつつ  
古里のためにと振ひたれたる  
君が行手に幸あれと思ふ

發賣部

郷土史の紹介  
郷土の歴史、史蹟の解説、史話、社寺の紹介、重要文化財等の紹介等

三、防長知名人士の紹介

防長出身及び関係深き知名人士五千

の略歴 雅号 狂金 喜用 作品の  
座右の銘となるものを毎号一頁提供

#### 四、社会教育諸団体、文化団体の紹介

體育協會諸團體、青年團、婦人會、各種文

化団体、趣味のグループ等の活動及び行事

の紹介と宣伝

五、文芸作品の紹介、文学者、文芸作家の作

品類分 文學者心素への推薦贈送目録付

六、市政其他に對する市民の声權

一党一派に偏しない本紙の立場による批判

と、市民の意見を採択する

七、其の他愛読者の御希望に添ひ、紙面の増

加と充実とを計りたい

イド半折の型をとり、綴り穴を設けた。

九、知名人士の代表的作品の写真、史蹟、文

祝 創 刊 蕪 市 地 方 史 學 會

[illegible]

34765











## 投書

小

“投げ売り”

土  
居

謙

で一杯だ。

日曜だった。近ごろは結婚する友人を助けるため、彼は週に洗われる見舞いを受けるほど新しい仲間になった家並みの間をゆくりと歩いて行つた。空気がさらさらとしていて、自分が清流を遡る帖のように感じられた。彼の心の中には今別れたばかりの友人の幸福に輝いた笑顔があつた。その笑顔に味方しているとか、苦の間に自分自身のうちに隠れていたり、甚が誘ひ出すされてきたので、彼は青葉の驕りような空気を胸一杯に吸い込んだ。

一年前、彼も現在の友人の一人のように幸福の中に溺れていた。彼は愛憎を以てつぎとつぎと結ばれた二人と結んだ。彼の前にあらはれし幸福が花に散り、咲き誇るばかりの余命の花であった。彼の好む音楽は、さびしく、哀しく、配置された一思ふすべてを捧げ、彼女を幸福の國から遠く送ることを自分の義務として、神に頼んでやめたのである。彼は腹を立てて逆して、定められたものを彼の四本の足で押し出し、見せかねないやうなほどであつたので、恐ろしくやくやく、かつやくはひよりの頃のやくやくを、正しくはその後の彼の絶望であるところなり。今でも彼は運

(第2号) (2)

蘇文化運動略史

本稿は後日更に補訂して私の計劃している「萩郷土叢書」の一冊として刊行する予定であるので、お気づきの点があつたならば是非御教示いただきたいと思うのである。

## 明治維新後の萩

荻原屋九年（二〇〇四）十一月十一日に  
 指月山に靈城が成つて、毛利輝元が関所して  
 より、慶長二年（一八六六）五月に時の藩主毛  
 利親頼山口に移鎮するまで、二百六十四年  
 間防長一州（現在の山口県）の政治文化の中  
 心地として大に栄えたが、明治維新前後に  
 は大改革のために甚だ衰微した。これより維  
 新の萩の文化動運の概要を記述したいと思  
 ひが、その前に参考として主要関係事項の略  
 年表をあげておく。

## 略年表

○慶応四年（二八六八）八月二十七日明治天皇即位  
○同年九月八日明治と改元す  
○同年十一月一日幕府解除を命じ、要害および移すを廢却し、幕元内の諸宮所を明倫館内に移す  
○二年（一八六九）正月二十日長・臨・土・肥四藩連署して板橋筆盟の儀を精す  
○同年閏月藩主毛利敬親文武振興會を防長岡岡間に布く  
○同年六月四日敬親の隠居願許せられ、世子

廣封（ヒロアツ）藩主となる  
同年六月十七日朝廷列藩の封土をさめ、  
府藩県三治の制を布く。よつて廣封山口藩  
知事に任ぜらる  
四年（一八七一）三月十二日萩城三ヶ所門

の解除を命ず  
同年三月二十八日前藩主毛利敬親山口藩庁  
内殿に薨夫す。行年五十三、忠正公と證し  
敬親命と号す。同年四月十五日従一位を贈  
られ、三十四年五月十六日正一位を追贈せ  
らる

同年七月十四日廢藩置縣の制頒布せらる  
五年（一八七二）七月學制頒布せらる  
六年（一八七三）二月萩町内の十小を開  
校す。川島（岡田謙道）、土原（岡田翠）  
河添（天野清三郎）、平安古（吉松淳蔵）  
堀内（栗屋蔭麿）、新堀（市川文作）、古  
萩（村上正）、五間町（中村鶴）、浜崎

河野三郎（世）、江向（中村親）  
同年五月従父あたりたる裁中中学を要則小学校  
とし、八月廢す  
十二月間澤主毛利元徳  
前名広野、その他有志金に於て義筆  
小学「巴城学舎」開校す。後の裁中学校  
前身なり  
八年（一八七五）十月三日堀内の園城放火  
のため全焼す。元家老首毛利家邸址にて  
なり  
九年（一八七六）六月一日中村雪鶴巴城義筆  
舎の校長となる

歐洲における青少年教育について (2)

宮城たかよ女史

母の立場からいへば、この不幸な子供にそれ以上の事をせよと懇切にかかせぬ意をもたれど、それは事柄の顛倒にかせしめたるやうなもので、世に於ては世界最大の母は教育を授けざる、大學を出さず、本をたづなくんませ。智恵をつけようといふべく、何といつたのでせう。聰平はたんに大きな窮苦を受けた小供達にこそ子

弟、姉妹と共に母を研究する任務、社会の改革、政治の刷新と家父的責任の重荷の下で、歐洲を始めに九十九國視察する事になつたのです。が、外務省は四國同盟では見て歩くのみになつたので、予定を変更して、スイス、フランス、ドイツ、英國、イタリアの各國を見出した。

園芸趣味の会の会

子供をつくる中で、よくうつつといった感じが、私にはよく分る。その母の母の母を考へて見た。日本の母と云ふのは大抵は學校にあつて勉強せよ、それ何大學だ、技術を學ぶと云ふ、就學におつて、知能をいかに伸ばさうと云ふ、世界世界の母の母のように人間らしい人間といふよりは頭大なる小のぼけや不供達をなからせつくらうと憂心してゐたので供達をなからせつて考へました。世界の母が手をなげば、二度と再び戦争はおこらないと世界世界の母は特別に張りをつつて研究したのでした。私は日本にいるときから不良化青年少年の子供といふ頃かに一州に居たのでした。ところがこの會議のために緒に於いては通常の參考となるのであります。會議終了後私は、青年少

二、この会の事業と事務所  
一、國策委員の發表を催す。  
二、我々が共同する、新商品紹介、販賣、組織、宣傳等に關しての晩會を、第一次事務所に中央公館におく。  
三、會員及會費  
一、現在のところ、金銭は、性別、老若をわなず、會員に紹介によつて入出出来る。

昭和二十二年三月、日蘇共同労働防務協定 座配氏(白田氏)によつて、張生氏、五氏、南方氏、白田氏、中村氏、松井氏等世話した。一、無駄、命令を増し、年々事も活氣を帯び、技術的ならざるに力を入れるてきた。

[illegible]















秋文化

号外

原野組

栗屋組

堀建築士事務所  
堀啓

川島

優秀映画鑑賞会

3月7日より1週間  
エデンの東  
主演 ジェームス  
デイン

3月21日より  
スター誕生  
3月27日  
大いなる希望

萩セントラル

22 日 —— 25 日

乱菊物語  
彼奴を逃すな

26日—28日

美しき  
女教師の記

# 劇映執

2月29日——3月6日

宇宙人東京に現わる  
豹（ジャガー）の眼  
かりそめの唇

永樂座

2月29日——3月6日

赤穂浪士  
お父さんはお人好し  
(かくし子騒動)

喜樂館

煤炭文化運動的昨天

(4) 田中助一

# 秋好楽会の紹介

メ

[illegible][illegible]



祝發刊 萩文化

(2)

|            |             |               |            |
|------------|-------------|---------------|------------|
| 北野右一<br>堀内 | 熊谷敦義<br>今魚店 | 角屋重一<br>堀内    | 渡邊迪知<br>堀内 |
| 中村教介       | 吉武恵市        | 岡崎寿義          | 林良雄        |
| 田中俊資       | 山根祝作        | 松岡雄次          | 三戸滋        |
| 村岡繁        | 桐山慶次郎       | 脇英夫<br>洋酒と日本酒 | 三つ櫻<br>東田町 |

祝發刊 萩文化

(3)

|                       |                       |                     |                      |
|-----------------------|-----------------------|---------------------|----------------------|
| 警察署長<br>鍋丁勉次<br>土原    | 中国電力<br>松本六郎<br>土原    | 櫻醸造<br>中村晋<br>土原    | 萩木材<br>堀幸夫<br>新川     |
| 新興物産有限公司<br>林宇吉<br>新川 | 土原<br>山陽パルプ<br>新川     | 東田町<br>渡邊藥局<br>渡邊新藏 | 東田町<br>若松屋藥局<br>若松十三 |
| 東田町<br>佐伯時計店<br>佐伯一男  | お茶と萩焼<br>原田茶舗<br>原田善一 | 上五間町<br>濱田金勇堂       | 各種寝具類<br>中村初藏<br>前小畑 |
| 八光堂カメラ店<br>村川寅夫       | 新川<br>山本時計店           | 越ヶ浜<br>福田齒科醫院       | 新川<br>前田藥局<br>前田豊作   |







































# 論説

## 萩の地形と治水問題 (8)

萩市 新居園

# 萩文化

萩市 新居園

川は外ばかりでなく、土原中央部の田地、江向から安古にかけての田地は二朝洪水の際には川となる性質をもっている。  
× 一六七七 寛永四年  
天福院 松高院建立  
× 一六〇七 七年  
福光寺 (元町) 妙光寺建立  
× 一六三二 八年  
清光寺の別院で、元公清光院此の年の七十四歳で歿したので建立  
× 一六三二 九年  
文徳寺、妙雲院建立  
× 一六三三 十年  
光善寺を重田町に移す  
× 一六四四 十一年  
宝昌院建立、四月古刹「三戸僧六」十一月長壽寺、清光寺遷す  
× 一六五五 十二年七月二十五日  
暴風洪水、相月松樹倒、元和八年の川澄い

從十三年目に再び水伯の災をうけた。  
× 一六三二 九年  
無助院 (初め願寺) 建立  
× 一六三八 十五年  
光源寺、榮周院、交光堂建立  
× 一六三九 十六年  
橋本大僧 (花松)  
× 一六四一 十八年  
皇福寺建立  
× 一六四二 十九年  
浄国寺建立、前年本年開鑿、防修修註使始めて出てくる。移封前後の経済的受難でなかつたことが、移封前後の人民の幸福であつたことである。其の為此の年からは、今迄の出来高による納税所額日取法を廢止して、植付回に納税責任額を約束する舊法を堅持することになった。地味による課税に努力水増で収税を増すことによつて、課税の努力を減らすことにしたものであ

るが、七割五分まで取り上げられた農夫に果して不安のない期待が持たれたか、どうかはわからない。但し為政には最小限度の予算が立てられるから、新法は奴隷から或る程度の期待が持たれたと想う。しかし不作の時は収税を加減してやる約束であつたこの不履行が目撃一揆の形でレオスタスなされたものである。  
× 一六四四 正保元年  
成就院建立  
× 一六四九 四年  
妙雲院建立  
× 一六四九 慶安二年  
護国寺建立、田中一本松の享徳寺焼失、常徳社は明治年代まであったが、これは平徳寺の寺内神社の残つたものである。  
× 一六五二 三年  
古萩より萩へかけて大火  
× 一六五三 承応二年八月五日  
両国大皇親、指月城破  
× 一六五四 三年  
享徳寺建立 (現在の地) 車馬町の大火で満願寺、三聖地院焼失。大願院工事始まる  
× 一六五五 明暦元年  
泉州の住吉村を流離、船岡屋松本忠兵衛 (今の上の町山本家先祖) 岡山南比須堂に勧誘し、後万治二年六月現在に移す。祭例を舊五社として、氏神等が修したものは寛文元年一六六一年である。  
× 一六五六 二年  
大願院落成  
× 一六五七 三年  
道を修理し二間とした。この年鼠患

石井規源齊監修

石井茶碗美術館

4月20日開館

東田町天狗屋

# 防犯知名人出考

## 1の部

飯田篤宗 通称孝一、右衛門の人。元治元年五月二十六日歿す。  
飯田直方 猪之助通称左門、助の父。宗海大組の士、万延元年春明倫館学頭海を拜し、萬延元年春明倫館法に就く。嘉永二年共に長州西海の番を巡警す。元治二年六月九日歿す。寺に葬る。享年不明。  
飯田道叔 名は貴政、岩国の士。元文二年歿す。  
飯田周水 名は泰英、字は君実、通称松軒。岩国の士。  
飯田範正 周原、里見忠彦とも云い、字は子邦。号を環山別に號す。夷浪ともいふ。  
飯田直衛 号を南陽といふ。三田尻の人。  
飯田蕃俊 喜太郎、俊助、基兵衛。昌備ともあり、字は子介。号を竹掃。号す。華俊の父、徳山の士。天保九年歿す。

飯田樂軒 越氏監警、防府の人。  
飯田吉次郎 名は俊徳、熟生、年七月藩命によりラシラシに留學す。維新後工部に入る。安政六年四月「留學飯田吉次郎」の懸賞の懸がある。  
飯田七兵衛 三田尻御船手の土坂本山について、高橋を學ぶ。松陰氏門生で、大星大目録の免許を受ける。  
飯田永傳 藩儒。文化五年十一月八日歿す。  
飯田正伯 寺社租税師、万延元年七月浦賀にて罪を得入年中文久二年歿す。三十八。松陰門生松陰の死体を受取り、同門に葬る。松陰安政六年江戸佐野町入獄中に曰く「此地にて飯田、尾寺、高杉等侯の為に周旋し、」  
飯田清庵 山根孝仲の子。醫を業とす。「國室文稿」  
飯田吉庵 清庵の弟。「國室文稿」  
飯泉喜内 名友輔、旗本曾我、徳右衛門家來、安政大願院死。松陰の萬杉に与えた書に「喜内を助つたは無益の殺生、夫はともあれ」

内を断る程では、同一松陰も断れずとも、道義は免れずと曾我致し、あつた。  
後 道 濟 名は俊徳、岩国の文化十一年歿す。  
生田良佐 名國紀、号星山、生田義山の男、平生の毛利親政の臣。文久元年十一月歿す、二十五。從五位。二二に松陰門に入る。  
生田知毅 櫻軒、飯田忠彦の継子。文久元年十一月十二日病歿、從五位。  
生駒等壽 名は勝政、幼名金十郎。後市郎兵衛。更に市之元親政の人。關を關く。寛文六年藩に仕へ、後大組に列す。元祿十四年五月八日歿す、七十七。  
伊川雨村 真宗僧、關を關く。住職。  
伊木 均 初渡辺孝三右衛門。清米に生る。七御願員。文政九年清米に生る。七御願員。文政九年歿す。正五位。  
池内大学 名華時、号陶所、儒医。京都知恩院田六郎にて暗殺。松陰池内が暗殺を水戸公に賦するを激賞。  
井川千之助 名義長、振武殿。創傷再発して十二月歿す。(以下次号)

一 火の鳥

永樂座筋

TEL 1183







# 論 説

## 萩の地形と治水問題

(9)

# 萩の文化

編集兼発行 次郎 萩市 電話218(増設)  
印刷 萩市 萩印刷株式会社  
印刷 萩市 萩印刷株式会社

△一六五九 万治二年  
田町大火、家一八九戸、寺院五、清光寺も  
焼けた。焼入焼出再建。  
△一六六〇 三年  
三月朔内大火、万治元年二年と連続  
による凶凶、島地は殆んど全滅し、被害  
の調査にも困った。被害は元年が銀百十  
二石三斗五升、三年は一石八斗と高くな  
ってしまった。二年には田舎を官給した。  
△一六六三 寛文三年  
一月朔内の火、八月風雨、其の役は日  
で、四圍連年の万治元年にも連用金積立  
は表せられて小判千両、銀百四十貫。寛  
文三年は小判二二、三〇枚、一歩金千  
両銀二、五〇三貫。四年には一萬貫の銀  
が貯蓄された。  
△一六六四 四年  
八月八日大水、萩附近特にひどく被害甚  
大。

△一六六五 五年  
万福寺を現在の地に移築。格の文殊堂、  
一才城内に宝蔵が建設され、郡司長兵衛  
は壽命により出雲大社に大馬頭を鎮座して  
密通した。墓二丈六尺、重さ六千五百貫。  
△一六六七 七年  
城内の妙法寺が焼失。  
△一六六八 八年  
一月と四月風雨、指月城焼損。  
八月洪水、十一月萩より十間へ大水  
十二月常念寺炎上。  
△一六七一 十一年  
松高院より出火し、高島院まで焼失。  
△一六七四 延宝二年  
西国大水、八月一七、二三日、  
△一六七五 三年  
西国洪水、米商人の買しめ、他國へ米を  
移出、即食、増水再渡、前島院の被害。

難民救済小冊を建て、百万救助に努めた。  
△一六七六 四年  
五月六日洪水、特に萩は甚だしく、日輪山  
(南明寺の山)の東谷が数寸支崩れたとい  
う。城下町に夜露が多くなつてきた。  
永福寺、万福寺建つ。  
註、地震の多い萩が六月一日から月末ま  
でゆれて寝屋が大分揺れたことであつた。  
翌五年の六月にも大地震があつた。  
△一六七八 六年  
八月五日暴風雨、津波。  
△一六七九 七年  
七月一日、四、二日と暴風雨、洪水、  
土民困窮甚だし。六月の吉川公が米一  
万石を献じた。六月には地震もあった。  
△一六八〇 八年  
六、七月間雨、萩は田町坂町沿河浸水  
△一六八一 天和元年  
二月土屋山町、古萩、重役約二六〇戸  
焼失。  
△一六八二 二年  
三月、平安寺から出火し、城内へ大火、  
で、天徳院、當院八幡、金剛院、灌園寺と  
焼けた。指月城は死者の防火で免れた。その  
時天樹院公理の位牌を玉江松山(前形)  
萬壽寺(野坂堂元)に移し、一時これ  
が天樹院と称し、隆興寺河津湯へ移した。  
後天樹院が元の所蔵せられたので  
移されたのである。  
△一六八四 貞享元年  
萩の口を築橋。近町に多層を建てた。  
米価銀百目に付三二七。  
(以下表略)

中國第一位の榮譽

# 三 つ 櫻

三桜酒造株式会社萩支店  
田町 TEL 655

# 防 衛 知 名 人 生 考

(8)

1 の 部  
諫早 已次郎 生二半三郎 易  
堂 松下兵衛 生  
一時、諫早に入りし四國戦争の際、  
長として小瀬川口に警戒し、維新後、  
に出陣し、晩年、司となる。松陰曰、「  
兵衛は初めたるならむ。半三郎、  
ならむと申せし由、由、由、由、由、  
家兄弟書簡。  
諫早 作次郎 仙基清  
生田 源七 増田生田謙蔵の  
兄、安政六年九月江戸藩邸にて松陰の招  
中世話せし松陰曰、「源七も作事方相  
め時々来る。なみなか感心なる男子也」  
石井 梅枝 山口の師家  
石川 種吉 大内薩摩の臣、兵  
田元清の兵隊の師  
石川 厚狭之介 名正臣 初三平又  
山平 振武隊小隊  
司令、明治元年正月五日伏見にて戦死す。  
石川 忠 紀 増補防衛の編者

石川 一 竹田新八郎 貞幹  
石川 復 子藏 豊洲 石非  
蔵とも云う 号江出外史  
石津 新藏 松陰曰、「松陰石津  
の勝物成敗は、石津に頼み、松陰に  
永四年八月、大内親王、  
石堂 鈍藏 友常  
石原 良閑 江原半右衛門  
井尻 万谷 名久 字公天  
岩 倉具 祝 贈正一位、前大政  
大員、号友蘭、  
明治十六年、松陰曰、「大内、岩倉の  
論を知つて二をばらず。吾少得、  
正一を諷するの語、かく云ふべし」  
と、江見書す。  
五十君 又一郎 夷守 板場五十君  
市川 俊助 松陰を介して至り  
別を告げて来る」

四月七日 一時  
花のまつり  
童話会  
日の丸保育園にて  
主催 萩市童話研究会  
と函達文籍にある。当時安政六年正月五日  
は先生野山獄中であり。  
市 之 進 萩松本生 塾生  
元東無頼の術であ  
つたが吉田無道の導きで門生となる。松陰  
曰、「一日中余の側にあつて机によつて書  
を止めない。一見他と異る、今果して凡庸に  
非ず」 函達文籍  
伊 勢 華 北条源義 小治  
雲田 秋武 氏  
新右衛門  
伊 勢 煥 章候 竹澤 小治  
米谷詩記の著 陸軍省出仕 明治十六年一  
月、五十三  
井 関 英太郎 名忠臣 山奥英太  
道生 文久三年十月十四日生、  
自萩、希兵衛士、従五位、七郎守衛

化粧品 専門店  
アクセサリ

# 長門屋化粧品店

東田町 TEL 873































論語

說

朝臣圖

# 萩の地形と治水問題

平安寺建立。翌年、蝦夷の防の時略鐘始まる。  
△一六八七。銀目目に及ぶ。  
○一六七九。鎮西。  
唐橋より平安宮までの新道をつくる。  
×一六八八。元禄元年。爲松寺普声寺（鶴江）轉立。  
△一九〇一。東光寺落成。（吉村公傳僧侶を偲する）。  
一粟院地名略轉す。  
△一五七七。六月四日流洪水。米価二石四斗。  
△一六三三。五年。田島掛書二町三町歩。倒壊家屋約廿畝。米価一石六斗。  
△一六四五。山形豊自。翌夏七月一日阿川が川上より以下が乾涸しと云ふ事象があった。  
△一六九五。八年。

甘野郡は彼等寺の西北にあつたものを現御所（修驗・西福寺建立。弘法寺再建。  
△一六八九。鎮西三間、桂陸藩。玉江別邸及び城内天守塔造る。  
△一七〇二。一五年。五月一三。六月一日大風雨洪水。翌二月の洪水と共に、關内へ高瀬が入る様で大阪萬石餘の汲取であつた。米価は一石三斗九升ノ高くなつた。  
×長泉寺略轉す。  
△一七四〇。宝永元年。六月三日。八月二日大風雨洪水で穀價も各く、其上七八万金の修理。費用幾千萬金の出されて夫十八万金。江戸川千貫余の出血。士卒の饑饉は半分のとなつた。  
△皇統親政。  
一七〇五。二年

△本月日洪水米価 石六斗七合五勺  
 △熊本藩の糧秣を石に改造 越内より平安宮に大火。  
 〇 年  
 △川島、河沼の薪土手、湘淵、小松川の薪溝を過つて水はをよとする。  
 △一七〇六、三年  
 △六月大風雨、米価一石六斗七合五合  
 ×翌四年幸徳寺金塔落り、その翌五年には法皇寺御徳御建像竣工。  
 △一七〇九、〇 年  
 △正月築橋、諏訪宮の諏訪神社を松本に遷す  
 正江未知となり、救米庫を設けたり、長さ二十間、巾四間、五間、各蔵二千石貯米し滋潤御教米蔵と呼ばれた。  
 △青柳西法寺の手依伝成。  
 △一七一二、正徳二年  
 △五月、八幡風雨、米価壹石一斗一斗となる。九石半の誤記。  
 ×松本通心寺、鶴江戸寺建つ。  
 △七月三日、凶凶燃焼、損傷は六万石余であるが連年の凶凶燃焼による被害甚く速に石を點てに下つて九斗七升となる。  
 △平安宮、川島に堤防が通る。  
 △一七一六、享保元年  
 松本藩を板本に改める。長巻を河沼に改める。長巻は長宜の坊名と同じである。  
 △一七二七、〇 年  
 △四月国内の立木なき山に松の實を時すか。  
 〇 年  
 △川島より新堀川に溝を造る。鵜堀川の小川に鹿角を築る。  
 ×堀内河沼、仙館 九四〇石焼つ。  
 △一七二九、四年  
 △七月以雨凶雨雪と高潮の爲、秋刈穀類米価壹石五斗九合、仙館 年は九斗九合で記録値が高くなり、仙館 年の御用米米一石の納付金、百石に付、八石となる。  
 △一七三〇、〇 年  
 △仁徳神社遷移、金谷天徳修築、鶴在池。  
 △一七三二、二年  
 △七月豊前雨、秋雪、米価三斗八升  
 △一七三三、三年  
 △六、七、八月と暴風雨洪水  
 △一七三三、〇 年  
 △五月以降大風雨、河沼及中町には二月に一五〇斗焼失。  
 △一七三四、〇 年  
 △七月より前雨へ、六月平安宮、九月一斗、河沼町に大火災。爲に堀火橋及び比治寺焼失、翌年に百金蔵所に設ける。  
 △八月は大風雨洪水  
 △一七五二、〇 年  
 △一月間、火災、四月より五月にかけて大雨洪水、六月より八月、八月大風雨洪水、田島損出二万二石  
 △一七六六、一年  
 △七月五、六日大風雨洪水、損傷七万五千石  
 △一七七七、〇 年  
 △一月間大風雨洪水、損傷六万石  
 △一七八八、一三年  
 幸以雨凶風洪水、  
 △一七八八、二年  
 △五月六、二日洪水、川島の土手初洪水は唐に及ぶ。  
 △一七八九、〇 年  
 △六月畿の火災、八、九、月豊前風洪水  
 △一七九〇、一五年

秋文化

編集兼発行人  
田辺竹次郎  
萩市鶴江  
電話218(呼出)  
購読料月80円  
印刷所  
萩市浜崎町  
萩印刷株式会社

訪悉知名久生考

(11)

イ  
の  
部[illegible]

岩政信比古

岩政 信比古 通稱平賀、周防政、  
同學者千手使僧の嘉勢と千手兼成の師、安  
政三年十二月十八日央、年六十七

飯田 央 始太郎  
京信、重政、  
池田 梁藏 徳山の入  
井関 古溪 三郎右衛門、白根  
父、太田藤右衛門清の  
井関 美清 源吾、他國、古溪  
の息男、松下山生  
磯部 雄藏 名敏、字伯儀  
号眞淵  
磯部 渡江 半助、濱州郷士  
井手 彌太郎 伴和、よく。郷土  
兵隊員、應仁元年辭職す。従五位  
伊藤 百合五郎 名重徳、初め三郎  
弘化二年生。生野郷に在り。中田由山  
卿正侍、文久三年十月十四日自決。従五位  
井上 達次 孝義、橘清、徳山  
石堂 友常 の入、享保年中、  
名師範  
市川 玄伯 名名師、字仲章  
改む。又伯通稱、非と号す、其居を  
無明堂、玄伯の遺跡、船木入、山  
大華佐佐郎、寄に字ひ、傍ら医業を修む

稲葉栢臺 名延年、通称八郎  
 左衛門岩國の士、  
 文政二年卒。諱詩人  
 帰郷して塾を開く、後市川文翠の塾後其跡  
 をつぐ、數度召されたが任官せず、嘉永五  
 年二月十三日歿。五十七

井上鳳臺 名光達、字才甫、通称才介、岩国の士、漢詩人、文政十年歿

館

監修  
美術館  
開館  
狗屋

齊源  
碗  
20日  
天

石井規  
井茶  
6月9  
日町

石  
東田

卷之四

△ 一七一九 四年  
七月以降風虫害と暴潮の爲、秋の收納半  
米価五斗七升五合、尙翌年は四斗九升と  
で記録的に高くなる。士卒の御馳走米。

へ(の納付米) 百石に付一八石となる。  
 × 一七二〇 〃五年  
 仁徳神社建立。金谷天神修築(現在地)  
 △ 一七二一 〃六年

△ 一七二二 〃 七年  
七月暴風雨、秋蠶害。米價三斗八升  
△ 一七二三 〃 八年  
六月・七月・八月と暴風雨洪水

五月に隣大國郡清水河津及中興郡  
月に一五〇戸焼失  
× 一七二四 九年  
一月堀内より新堀へ、六月平安吉、九月  
堀及河津中町に大火頻々。為めに堀火機

び辻番を置き、翌年には百余ヶ所に設け  
△ 八月には大風雨洪水  
△ 一七二五 年  
一月朔内に火事、四月から五月にかけて

雨洪水、六、七月は日で虫害、八月大  
 雨洪水、田畠損害一二万石  
 △ 一七二六 一年  
 七月五、六日大風雨洪水、損害七万二千  
 △ 一七二七 二年

春以來大風雨洪水、損害六万石  
△ 一七二八 一三年  
五月、六、一二日洪水。川島の土手切れ  
水は唐樋に及ぶという。

△ 一七二九 〃 一四年  
六月藏元の火事、八、九月暴風雨洪水  
△ 一七三〇 〃 一五年

石井規源齊監修  
石井茶碗美術館  
6月20日 開館  
東田町 天狗屋



(13) 新聞の巻 (其四)  
田中助一

新本社を設け、「新日本」を創刊した。これはあつたはタブロイド版本印刷で、一月五回刊行であつたが、後に版紙片断りになつて、現在では、縮減してゐる。

同十月十日、日新聞「山陰スポート」社が誕生し、「山陰スポート」を創刊した。

新聞は消滅した。タブロイド版本印刷の「買、旬刊」としてつづつたが、二号まで出た後で廢つてゐない。

同十月二十五日刀傷事件が、同會告(〇七番地)萩新聞新聞を止めた。

「萩新聞」を創刊した。月で四号として出たが、現在萩には格別の新聞は一つもない。

一月、車上死が、何報も出てゐたが、文化興のため役にたつてゐることを、新聞にしようとなつた。

最後に終戦後出来た萩新聞について、新聞記者としておく。

萩商工高等學校では、二十三年九月二十一日、孔板印刷の「萩商工日報」といふものを出してゐたが、一年のうちに消滅した。つづつたが、紙名を雑誌とした結果、「たちばな」決定し、現在まで縮減してゐないタブロイド版である。

萩市番字學校は、同校が廃止した二十五日四月、「萩新聞」を発行し、現在までで廢してゐる。タブロイド版印刷である。

以下に、古い紙面を所載したのは是非不明である(その頃終戦)。

## ○夢判じ

寅次郎の虎は猛獣であるから、二十一個勇士とはまことに自分にふさわしい号である。自分は之まで事をあげて三回失敗したが、まだまだ後に十八回或すべきことが残つてゐる。夢は正しく平素達げられない願望の表われであることが特にこの先生の夢でよくなづけれる。先生が絶えず旅をされ郷里の肉身に恩をばせ、尊皇親愛の大理想のもと鑑而後

己の意氣を以て思ふに任せぬ道を奮進された  
お姿がその夢に依つてほうふつされるのであ

る。

○ 奇夢 靈夢

支那で國師といふ職生といふ少年が都に上る途中、樊桐峯の麓に立ちて杖を借りて履襪を脱ぎとて、都に出て官に仕へ、永く健甞いようとした。都八十一年の一生を過した夢を見て覺めた。見ると茶園に臥つてある前に吹きかきまきび飯がかりつゝ賣つてゐた一貧賁、國師の夢とか貴族の飲とかの夢もこれとて、彼等の夢が感嘆の夢より上にはなかりたといふ事、彼等の語を聞かぬ。

その門からいへば、夢の夢といふは、夢の下の下に降つてたところ、夢の中、機安國に行き、南村郎部となり、二十年過したと見て覺めたといふ。

(以下次歌)











秋文化

論說

朝臣圖

編集兼発行人  
田 辺 竹 次 良  
萩市鶴江  
電話218(呼出)  
購読料月80円  
印刷所  
萩市浜崎町  
萩印刷株式会社

# 萩の地形と治水問題

一七五五 宝曆五年  
 五月洪水 六月驟雨  
 一七五六 六年  
 八月洪水 祇城内台所洪水、勿論市中至る所に至るに達す。  
 一七五八 九年  
 横本に洪水 備を高くする。金谷天神成る。  
 一七六〇 十一年  
 弘法寺の黒龍成る。  
 一七六一 宝曆十二年  
 唐崎街道成。  
 一七六一 十三年  
 七、八月暴風雨、洪水 田島損傷十六万二千石余。  
 (註) 兩國口 五〇五、五九九人  
 圓石屋 八八八、八八六  
 米価(百石目) 一石六斗一升五合  
 岡田法蓮(一石目) 一石六斗五升五合  
 御寄居仕成る。  
 一七六五 天明五年  
 竹本峠、黒龍を引く。新川(西川)中流に於て深野町を用いる。九月、深野町嵐波成る。  
 一七六六 三年  
 松本保壽寺、香川、保壽寺等建立。  
 一七六六 四年  
 唐崎前平手 黒沢邸跡、後發野の地 江向榮治閣建立。  
 一七六七 四年  
 御殿屋敷成る。一明和六年  
 一七六八 七年  
 七月暴風雨 田島損傷十二万七千石余 米価二七斗九升九合  
 一七六九 七年  
 七月洪水、八月暴風雨 損傷十四万八千六百石 米価二石六斗七升五合  
 一七七二 八年  
 五月八、四日 洪水 損傷約九万石  
 一七七二 安永元年

春から暖。風雨。洪水があつて損害五万六千石余。  
 一七七二年 安公二年  
 堀内大失。春日社焼燬。  
 天趣院現在地に復す。  
 一七四四年  
 六月二十日洪水  
 春日神社復旧。  
 一七七八 五年  
 五月二〇二三日 大洪水。葦の垣は舟で通行する被損甚大なる無算に、東照宮修理工事を中止せられたが、それ迄に銀一万四千三百貫。  
 一七七八 安永八年  
 八月五日洪水 損害十 万六千石余。  
 一七八〇 九年  
 八、九 洪水  
 一、二、三 萩大島二戸を現し他は全焼  
 損害二六三千三百三十八石余  
 一七八三 天明三年  
 七、四、八 萩大水。夏季西国大水 損害八十三万石余  
 萩府より糧金する。  
 一七八八 天明四年  
 五、八 萩大水。終年飢饉。米価騰貴。銀一匁に付六匁の市価。  
 一七八六 六年  
 初夏より旱魃。八月二十九日洪水。損害十萬四千石余。除役を布き糧食を減少す。  
 米価一石 斗六十五文  
 西国人口 五萬八千五百三十七人  
 一七八九 寛政元年  
 四月十六日飢風。  
 四月十七日地震。松本御代修。  
 一七九一 二年  
 五月十八日洪水。特に萩港に甚し。  
 一七九二 三年  
 七月二十三日 萩大水。地震。  
 七月二十三日 萩風雨。以後旱魃  
 十二月二日 萩三十年來の大地震  
 損害十二万二千石余。御家十五萬五千四百石。  
 一七九三 寛政五年  
 終年飢饉。秋甚茂く不作の爲。  
 一七九四 六年  
 夏以降旱魃。風水害。損害約六万石。  
 御家百五十石。  
 一七八八 八年  
 六月五日萩大水。家屋損失多し。  
 損害十五万八千四百石余。御家七百三十八石。  
 一七九七 九年  
 八、九 萩大水。萩地丁洪水。  
 警備隊を調へて救ふ。  
 一七八八 寛政元年  
 夏以降旱魃。風水害。損害八万七千余石。  
 御家五二戸。米価一石八斗升。  
 日光東照宮修理の資金。精金銀八万兩。  
 西国人口 一萬。  
 一八〇二 二年  
 三月二四 天明四年  
 六、三、四 二五七六八  
 男二八八、二六二八  
 女二八八、二六二八  
 一八〇一 享保元年  
 住吉神社を改修す。  
 一八〇四 文化元年  
 五月十三日 地震。  
 西国人口 一萬八千二百石。萩大水。  
 一八〇七 四年  
 (以下略)

夢

(續)

田中俊介

南朝の夢の如きものがある。わが大正初期の發  
 達階級の補給のお夢も此は種がこゝに在るの  
 である。天の如くと思へる。  
 支那の天の如くと思へる。支那の屋簷の夢  
 にはともない平和の理想國を遊んだ。之が  
 善しといふ國である。  
 全くくろの莊子は夢で胡蝶になつたといふ  
 昔から英米兩國の人生は夢である。夢吉  
 といふから思順なものがつきものである。夢吉  
 も、私淑大師が信託大師も、母が日頃慣に  
 入ると夢で娘になつて伝へられた。  
 私にも夢が夢の数々の経験がある。幼な  
 といふ人になつて、飯をこぼし、面をこぼし  
 と母にいられて、目をこぼし、夢がけは見  
 えたと書きた。夢から小さい頃からのよ

夢の中に、詩歌があらわれる。亡くなった父の墓に草薙の茂つたところを「男兄弟い／＼」と記して浮かめたことが、後には「こゝで」とな記憶に浮かんだ。ところが唐土へ旅立をするのである。昔讀んだ詩の中に、句のことが分った。黄鵠は鶯さんだの、鶯の鳥尻にはちゃんと張っていたものがある。

又先づ夜中に「ものもの八十十郎のかん杖杓すずめさしに絶ちぬき」は、歌人だ覚めることもシステムを点けて書き記した分の緒など古めかしい。サダメという話に分らない。字書をひいて見ると、伴の緒は

領してゐた。さきほど、田舎に賣つたもの、これ勿れといふ神童なる人、師匠之久くしたものである。万延集の拙文を人語のしくしたもので、八十氏の時代木にひつたもので、波の音知らず、江の潮の音知らずにつたものと考へる。伯私の夢は、これは科学的の夢がよい。拙文は、兵衛が數學者であつて、佛人であつてせういふものか。

丁度ベシリウが用化された直前の、アテラ、助患者の疑が葛藤の中と聞かされて、アテラ、病も、腫脹には、あつたやないと思ふた、アテラ、賢く、フレンジウの効果を、使、ベシリウが、用化され、治癒、フレンジウの効果を、使、今の病、研究の基を、らいた、このに、喰ひ、もう、つ、研究した、或は、が、ノ、バ、實を、もう、つ、

又昨年の、月、後の、夢、生命、現、の、行、つ、

の手で、アテラ、に、つ、た、事、に、つ、て、誤、の名も、誤、の、派、が、第、二、派、と、一、般、に、云、つ、た、つ、た、い、

其、後、進、歩、と、し、て、現、代、迄、迄、一、藩、の、御、師、御、用、や、町、年、老、を、助、め、一、幕、府、御、師、御、役、が、一、藩、御、師、御、用、に、な、つ、た、と、考、へ、る、現、在、の、御、師、役、は、長、長、子、代、に、継、繼、で、一、藩、の、町、で、を、傳、く、古、の、も、の、

服、御、師、役、は、由、來、は、御、師、役、と、し、名、付、け、た、一、号、と、し、て、山、門、前、の、前、と、し、名、付、け、た、一、号、と、い、わ、れ、一、説、は、は、多、摩、齋、齋、松、原、山、深、野、近、藤、八、郎、八、郎、が、當、時、秋、毛、和、藏、金、藏、と、し、て、不、欠、の、も、の、あ、つ、た、と、し、て、五、郎、と、も、多、か、つ、た、と、い、ふ、れ、が、服、御、師、役、を、授、け、た、店、が、多、い、ので、服、御、と、し、の、間、に、な、つ、つ、た、と、云、わ、れ、い、る、

一 齋、藤、山、園、記、

[illegible]

菊屋家勤功書拔書

私家蔵の筆は海潮瀟々筆にて御座候也。戦国の御寄附仕へ大内家に随身可<sup>レ</sup>と云う書を出して、年代を追ひて事詳し毛利家との連携功績の數々を美濃浪用紙二十枚枚に書かれたものが數冊ある。

大内末期に石川亦十郎といふ人が、御内簾を受けて町人となり菊屋友味と名乗り山口に政經町支配をしていた時、大内輝弘が山口に攻めつて来た。その時格別の手柄を立てたこと、元就公の盛狀や直筆の短冊等も押領したこと、

文政二年萩の阿古兵衛・友味の次男菊治郎云うに人に店を問かせて漁士等の仕入等を商にしていた。その店は今、天橋院あたりの所であつた。その運河の北口附近が入江となつて舟の出入する港であつた。当時は今浦とも稱してゐたが、現在の雲中城と漁士町が引越をしてゐる、その小川である。

雲中城細張等の相殿等も菊治郎宅を使用せられた事もあるらしく、足軽等の合宿所も菊

の名で阿彌の派が流れ、一般に云々様になつたといふ。

其後進退として現代迄、藩の御金御用や町年老を助め、幕府御目録役が度々宿泊してゐたところもある。現在の藩長屋は、宿泊の雄飛で、萩の町にある。現在古物も代。

服部町は由來前御町といふ當時町第一号として、松門前町の前として名付けたといわれ、一説には安原、齋藤、松坂屋、深野、近藤、八木町といふ當時萩で五、六金持で不足の欠もあつたが、元和町といふ名付たので、それが服部屋を後、店が多かったので服部といふの間に變つて來たといふわけである。

○唐園圖説

を擧げた杭あつた。向應いを見ると、上り土を  
と称しし土をになひをせり。仏像に朽たつ  
りもした。法師等に夢遊轉り、いふは、  
たしかあつた。又遊ひなど、云々を主んじ  
吉事の前途としたことなど、夢を惡しむ  
弱い人間の一つのレステスである。

藤原兼盛、或夜夢遊、閨中、大御所降つて、ある  
と夢みたの、夢、岳、に、見てもつたと云ふこと  
路は白い、道は又聞かぬ。閑白も、白も、  
路つたあととした、きなく閑白なるが、  
違ひない、と判じたる。夢を見てその判が、現  
て少し肩つばものである。 (以て、本水)



蘇文化運動研究

明治三十一年四月一日日本教育会山口部  
会萩支会が発会した。これが後年長く萩にお  
ける文化運動の中心の団体となつた教育会の  
濫しうであつて、会長には阿武見島郷長口  
羽良介が就任した。

右田山利氏の母に、荻中孝の叔父新藤善徳は、町内会長と共に山口県長官<sup>(一)</sup>大和落着いた。それより萩市で校長として立派な教育を計画し、害毒のない、敷地を有する校舎に着手した。万急の場合備置口吉原、國正に着手ならぬ。奥座敷にあり果合ふといひ解決して、九月二日、校長松本恒三郎と伊藤孝忠が、荻中孝と知り、校長松本恒三郎伊藤孝忠を誘ひ、彼の職名に移ったといひ、問へられたが、ついで新倉舎に移らねえといひ、文字通り八太能が初任校舎にせよと委任し、十月十八日に開校式を舉げた。彼等は水戸生まれ、東京大學にて漢學を専らした俊彦であつたが、彼が校長になる前、地方志書部に就出身の元老齋木龍川(高田)節子龍馬館に迎へるや、熱心な活動加ふる品も、承服して居たとする。一方地方力者の之に反對する者もあるといふに実現ならなかつたといふことである。(河津通教談)

三十一年一月二十日に阿武野英立圖書館が荻中孝の構内開設された。その創刊の目的は、主として中學の教師ならびに生徒の研究に資し、あわせて公共に仕とするため

(14) 田中 橙香

郡の人が密着し、密着の諸君西丸九村久氏、河野隆一郎（公米村）、岡十郎（三川村）の二人が密着新聞の主筆であり、校長は新田義典に兼任して、新聞編輯は「東京新聞」編輯の賀岡開蔵が、これ「東京新聞」編輯の報告とよれば、當時が主筆兼編輯である。畢竟、黒澤清は、有業者の幸手指導せられたもので、出来も主筆の企及ででない、故にしては國體新聞の編輯として、中・教育と教育の有志者に資せざる、學校敷いたものにて、殊に餘計に繁雜なる學級敷いたもので、殊に餘計に繁雜なるべし、嘗て欧米漫遊の際にも、本地の実況を、格闘した、結構偉大に、列強と競争し、士女も亦、知識力にて唯の、ある、有難なり、我國にては三都會にあるのみにて、其他に見ても、能はざりしは甚だ遺憾とする、凡て、今、本國新聞を關するの団体組織し、互に援助した、たゞ、種々な所、定め、各々、一、五に援助した、と答へてゐる。（明治三十四年二月十日発行、同紙第五号）

岡田君のものに郡廳停止の變更に移筆せられた。

四十二年二月、阿部教育會が創立せられた。四十一年八月、日明學校高等小學校内に、國體新聞創設せられ、明倫學校と稱した。四十二年三月、阿部教育會が、新學校創立を預願し、これを準備高富郷に建設し、

これはすでに明治三十年の頃、阿部郡小

[illegible]

夢

英国のパンヤンほかのゲーテの「ファウス  
ト」ミルトンの「失楽園」にも比べべき「天  
路歷程」を書き、宗教文芸上大きな足跡を残  
したのが、幼ない頃からよく夢を見、特に罪や  
死や神罰のおそろしさの夢に苦しみめら  
れた。その体験が積つて「天路歷程」になつたもの  
と云われている。私も若い頃は墓場と火葬  
場の夢に悩まされ、それが多少でも信仰に入  
る縁になつたことと思ひ合せて懐しい。

○文学に表われた夢

[illegible]

(續)

田中俊介

こととその對照が著しい。且くこれに對しては、  
いふまでもなく、明證である。

胡笳やよはなかなの夢を夏の月(明石)に  
夏草きつものはものどもが夢のあと (上二葉)  
(つ)

旅に酔んで夢は枯野をかけめぐる (錦世  
の句)

竹筥の二句とこれ地味な旅行には申すまでもない。初め  
成感が深い。特に上二葉では藤原三代の榮華の昔をしの  
びし、笠をたぬ敷し太宰府の玉の露を見れば  
つて、笠をたぬ敷し太宰府の玉の露を見れば  
それは昔私私の歌の古木の影

大阪に在る俳人の句と云われたる終の句も  
散亂の私に於て丁度閑寂な夢が夜半大陸の驛頭を  
生前不遇の詩人啄木にも夢の境が多い。  
いま夢に醒る閑古鳥をけり閑古鳥を忘れざり  
またさかへくるかな

夢にきたる出でて年輪をかえつかの閑古鳥  
夢郷と國して泣きし一あの夢よ十四日  
まかり前年の朝なり

もう前年の心底より目醒れて、夢に夢に  
来て泣いてゆきしか

「夢こそ現世」の中かに拾つた歌であるが、  
人間としての夢を見るものである。

死の夢といふ天才詩人の夢に驚いた鴉が鳴く  
死の夢にもよく想入る清波の河が流れる

こゝに擬する。

(三)

舊藩時代（岩國街道）

## 駅路覺書

旧藩時代の交通に於ては、学校の先生や士農工商の間に於ては、左にその略を記す。勿論船路交通は、此の略の下の如くである。

| 駅名                                                           | 里数    | 馬料    | 荷駄料   |
|--------------------------------------------------------------|-------|-------|-------|
| 1、明木                                                         | 二、〇   | 八八文   | 九六文   |
| 2、佐木                                                         | 二、〇   | 八九文   | 九六文   |
| 3、山口                                                         | 三、二   | 一四四文  | 一四二文  |
| 4、吉市                                                         | 四、〇   | 一八八文  | 一九二文  |
| 5、富海                                                         | 二、〇   | 六四    | 九六    |
| 新市                                                           |       |       |       |
| 6、福川                                                         | 二、八   | 八〇    | 一二〇   |
| 7、富田                                                         | 二、八   | 二〇    | 二四    |
| 8、徳山                                                         | 一、二   | 一四四   | 七二    |
| 徳山石久米の中央驛である                                                 |       |       |       |
| 9、花園                                                         | 一、五   | 五二    | 七二    |
| 10、宇野                                                        | 一、八   | 四八    | 七八    |
| 11、坂城                                                        | 二、八   | 四八    | 二四    |
| 中間に坪市小驛がある                                                   |       |       |       |
| 今、市                                                          | 一、八   | 一六    | 二四    |
| 13、森森                                                        | 二、八   | 六四    | 九八    |
| 14、岩国                                                        | 三、八   | 一二二   | 一四四   |
| 計                                                            | 二、一〇五 | 一、三三三 | 一、四二二 |
| 此は天明二年の事であらば、徳田藩の交通に於ては、此の略の下の如くである。此の略の下の如くである。此の略の下の如くである。 |       |       |       |

**抄**

鶴臺漁叟

の槍玉叩め鉄砲玉五玉置、一銃叩け十圓(千文)で六十個のとろを、おんがけたがたて活鰐などの駄籠二層の小舟におんが「大買うてつかかちせいの」と云つて十二圓位くれたものであつた。

お親様を參訪交代で、松江江口にお上りになった道筋は、一の橋から貞顯寺、瓦町、田町の馬場の折して、新堀の石を渡り、津水車院の前、高大夫亭の前から頼永室の境より左折し、又右へ折れて御針町、橋本をより大折し、又右へ折れて瀬湖から大石の蔵のかき、六本松の四丁目まで小橋を渡つて、梅屋のお茶屋へ小僧・客仕度にして身を整えて鹿野村の峠を登り瀬湖側から山に出る一峠をこると、「うしろ」を眺め先本店がある。皆休んで送るゝも此處で別れる事になつたり。

明木は山の巾着から一俵し、鹽口の前の坂から、山口を出るに左折し、登るの山路に参に浮べ出すなわしになつてゐた。中佐佐木氏の駕籠に立つ、それながら山口道をさへ急がす。(以下略)







推されたが、数日のうち森会長が辞表を提出したので、十一月十三日に蕨市会議員・陸軍少将土井市之進が会長となり、これよりのちは同会が蕨市の文化運動の中心機関となつて

This image shows a blank, aged, cream-colored page, likely an endpaper or flyleaf of a book. The paper has a slightly textured appearance with some minor discoloration and a vertical crease along the right edge, suggesting it was once part of a bound volume. There is no text or other markings on the page.

(二) 肥料

(イ) 乾燥肥料

藥米魚油  
灰糠粉粕

一〇、五〇五〇

吉武は又勲王館建設の際一万円寄附した。  
(以下次号)

藤村が七十一才で歿し、一日に市公衆  
にて神葬により葬儀が執行せられた。  
同年十月一日、获出身の木材商吉武常一（六  
武恵市の亡父）は、明倫小学校の改築況とし  
山梨製グラندピアノ一台を同校に寄贈し

同年七月八日萩における教育功労者であり山口県教育会編纂の吉田松陰全集編纂者の人として病をおしてその任にあつていた安

明倫小学校長・荻中學校教諭・藤野一を表彰した。

十年六月二日荻双葉幼稚園（園長金子虎吉）は創立十五周年記念式を舉行した。

同年七月十一日荻市立青年學校が開校式を

職員は笠山頂上で国旗掲揚式を挙行し、四日三日精神作戦大会において御下賜の勸語の奉告宣誓を行った。

同年五月三十日萩市では摂政宮殿下行啓記念行事として第二回特別表彰式を挙行し、元

つくられてあり、前記のベトナム下随一の優秀なグラランドピアノがそなえつけてあつたのでそのちしばしば音楽会場として利用せられた。

九年五月十九日午後一時より蕨市内小学校

少将十井市之進が会長となり、これよりのちは岡金が秋市の文化運動の中心機関となつて、意識ある諸事業をさかに行つた。

八年十一月二日萩高等女学校の体育館および北館が新築落成した。体育館は講堂兼用に

抽されたが、数日のうち養会長が辞表を提出したので、十一月十三日に萩市会議長・陸軍



とよい。

(以下次号)

又は鉢にて露をよけをしていたなり。冬させ、寒中に一、二、回薄い下肥か油粕の水肥をやるとよい、三月の彼岸頃になると、此の苗は勢よく伸びはじめるから、適宜摘芯して枝を増やしておく。清

十二月から一月にかけて、咲き終つた古株の根元に發生する（冬至芽）を同好者から買うか、各菊苗圃から取り寄せ、苗のうちから育てて行くように、畑の隅

める。完全に燃が取れたら、乾燥させて保存して置く。

(4) 水肥料 油粕一升 水一斗の割合に混合し使用の際は十倍から二十倍に薄めて用いる。

れて上をぬけ、しる等にて覆い、充分醱酵して熱がさめる迄切り返しを續ける。熱が完全に取れたら箱から取り出して、前と同様水を加へて箱に詰めると再び熱を持つて醱酵を始

右の割合にて適度の水を加えて（豆腐からの湿度）よく混和し、グシヤ／＼せぬよう、手で握り放すとバラ／＼になる程度にして、箱に入

肥料  
(一) 爐炭 (モミ殻)  
(二) 乾燥肥料  
藥米魚油  
灰糠粉粕  
一〇〇  
二五、〇  
五〇五〇

武は又勸王館建設の際一万円寄附した。  
(以下次号)

として瘞をおしてその任にあたつてゐた安  
一が七十一才で歿し、十一日に市公会堂  
で神葬により葬儀が執行せられた。

同年十月一日、萩出身の木村善吉武常一（吉  
市の亡父）は明倫小学校の改築祝として

同年七月十一日、荻市立青年學校が開校式を行つた。校長は市長豊田勝藏の兼任であつた。

事として第二回特別表彰式を舉行し、元小学校長・荻中学校教諭安藤昭一を表彰。六月二日荻双葉幼稚園（園長金子虎吉）創立十五周年記念式を舉行した。

年五月十九日午後一時より蕨市内小学校は笠山頂上で国旗掲揚式を挙行し、四月精神作興大会において御下賜の勸語の奉誓を行った。

年五月三十日蕨市では摂政宮殿下行啓記

館が新築落成した。体育館は講堂兼用に使われてあり、前日のべが県下随一の優秀ランドピアノがそなえつけてあつたのでのちしばしば音楽会場として利用せられ

で、十一月十三日に萩市会議員・陸軍  
土井市之進が会長となり、これよりのち  
は萩市の文化運動の中心機関となつて  
ある諸事業をさかに行つた。

たが、敵国のうち食糧が不足を呈出



















防衛知名之士

(14)

ウの部

埋 忠 明 壽 前工部省に云々、勉  
来り後又京都に帰るといふ。

埋 忠 正 知 慶長年中の人

埋 忠 宣 政 元禄六年この人の  
代より岡田と改む

其右衛門

雅 樂 允

氏は勝屋、大津郡

中庄屋となり寛文中に至る。旧藩事務の考  
定法に於ては此の人の建議による  
といふ。それ迄の納税方法は取らずと称し  
物成を七公三民で済た。五公五民  
が常法であつたが、何れ藩も六公四民か  
ら七公三民が普通であつた。依つて百姓が  
出し渡るので秋播時に田地に就て実情を調  
査して恩作なげ七公、不作なげ六公と  
した。慶長十五年の飢で石上げをした為  
民貧は一層重くなったので勅で努めず他  
國に新る者も多く、良田も流れ官納も五公  
にも足らなくなつた。

奉定法は田地恩作に依つて奉初に納額を  
定め、それ以上の恩作は作徳とした。又凶  
年なれば災地を檢して減石するといふ制度  
である。依つて百姓の勤勞意欲を促し田地

を愛する風を生じた。

エの部

榎 本 就 時

埋元の臣元吉の次

後左近。慶長十七年秀就の偏名を賜ひ就時  
と稱す。中務少輔となる。後通江等又寄被  
守となる。明暦二年當職。寛文三年職を辞  
す。寛文八年三月二十九日歿。六十四、大  
宰寺に葬る。就時諱就時。萬治御法起草  
者。文海財政を輔し、徳に六年間に大判  
百枚、小判二二〇〇両、寄分金千個、銀  
二五〇三貫二〇〇目等を御奉した有能なる  
為政者。

役 観

郡邊郡邊山の修験

り。名符観。宗祖の役字を冠して役観と稱  
す。字道甫。通称右京。儒學又は興山と号  
す。人となり厚く、儒學又は興山と号  
す。文雄俊。筑前井南溪と親交あり。修辭行  
と。天明五年鳴鳳館の祭酒に澤本城繁殿  
と同じく擢んでらる。文化六年九月二十八  
日歿。五十七。

越 氏 塾

河野家哲、名は通

人。三田屋警岡万河野東の次男。自宅を以  
て塾として子弟を教育す。小倉彦平、山根  
之清、小田村公望はその高足なり。酒野姓

は御智氏である。依つて御氏と云ふ。昭和  
六年十二月從五位を贈らる。

江 木 千 之

号狂愚。岩國の人

江 木

号錦江、洋々外史

江 村 香 巖

俊敏。從五位、  
七脚髭。香巖、松陵

江 村 風 月

蔭之進。号季衡、  
下松の人

江 村 松 雲

明治初年造船局長

遠 藤 春 借

支那、正衡、徳山

遠 藤 貞 一郎

華信の子、徳山の

遠 藤 柳 齋

号伯島、佐平治

塩 谷 旭

号老田、通称助

江 良 房 栄

丹後守。陶明の

江 村 松 雲

明治初年造船局長

遠 藤 春 借

支那、正衡、徳山

遠 藤 貞 一郎

華信の子、徳山の

遠 藤 柳 齋

号伯島、佐平治

塩 谷 旭

号老田、通称助

江 良 房 栄

丹後守。陶明の

江 村 松 雲

明治初年造船局長

遠 藤 春 借

支那、正衡、徳山

遠 藤 貞 一郎

華信の子、徳山の

遠 藤 柳 齋

号伯島、佐平治

塩 谷 旭

号老田、通称助

江 良 房 栄

丹後守。陶明の

江 村 松 雲

明治初年造船局長

遠 藤 春 借

支那、正衡、徳山

遠 藤 貞 一郎

華信の子、徳山の

遠 藤 柳 齋

号伯島、佐平治

塩 谷 旭

号老田、通称助

江 良 房 栄

丹後守。陶明の

江 村 松 雲

明治初年造船局長

遠 藤 春 借

支那、正衡、徳山

遠 藤 貞 一郎

華信の子、徳山の

遠 藤 柳 齋

号伯島、佐平治

塩 谷 旭

号老田、通称助

江 良 房 栄

丹後守。陶明の

江 村 松 雲

明治初年造船局長

遠 藤 春 借

支那、正衡、徳山

遠 藤 貞 一郎

華信の子、徳山の

遠 藤 柳 齋

号伯島、佐平治

塩 谷 旭

号老田、通称助

江 良 房 栄

丹後守。陶明の

江 村 松 雲

明治初年造船局長

遠 藤 春 借

支那、正衡、徳山

遠 藤 貞 一郎

華信の子、徳山の

遠 藤 柳 齋

号伯島、佐平治

塩 谷 旭

号老田、通称助

江 良 房 栄

丹後守。陶明の

江 村 松 雲

明治初年造船局長

遠 藤 春 借

支那、正衡、徳山

TRC102084



田  
立  
文  
庫

1  
6

萩市立図書館  
111347571

